

## 海から 浦賀ドックを見て、 新しい発見をしよう



## Contents

- 02 イベントリポート 1  
レンガドック設計図のパネル展
- 04 イベントリポート 2  
夏休み海から陸から親子で産業遺産見学会
- 06 連載 チラリ ドック見学会 -ドックゲート 海から編-
- 07 連載 ドックのお話⑩  
昔、ドックで働いていた方へインタビュー
- 08 連載 うらが今昔⑩  
「足立社長 退陣要求」

### 浦賀ドックには

歴史的価値の高いレンガドックをはじめ、産業遺産が集積しています。

### レンガドック

レンガ造のドックは日本に2基しか存在しません。もう1つの川間ドックは現在ゲート(扉船)が開放され海と一体になっているため、ドライドックとしての形を残すものは、浦賀ドックが日本で唯一となります。

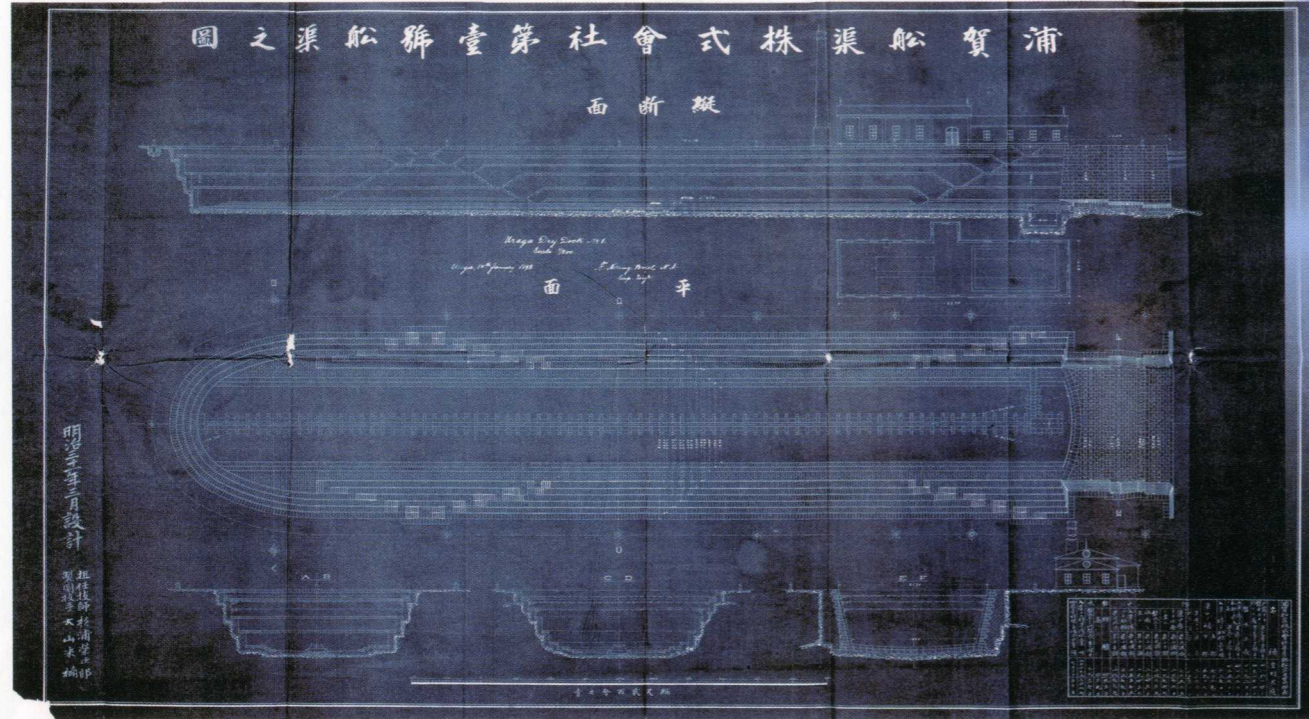


# 第18回咸臨丸フェスティバル共催イベント

平成28(2016)年4月30日(土)、第47回レンガドック活用イベントを第18回咸臨丸フェスティバルに参画して開催しました。(仮称)ミュージアム・パーク推進センターでは、ワンダーミュージアムを企画し、レンガドックの構造についてパネル展示を行いました。明治31(1898)年設計時から船の大きさや形に合わせて改造や拡張の工事を行い、現在の姿になった様子をまとめました。

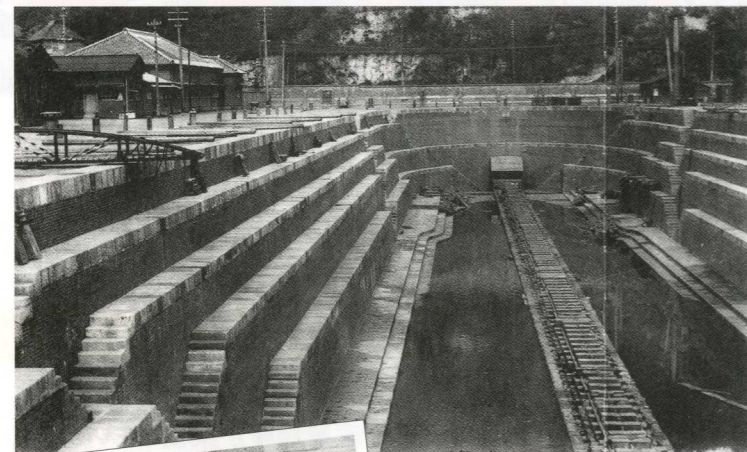
(協力:ドックと浦賀の歴史を愛する会)

## 浦賀船渠株式会社 第1号船渠設計図



明治31年3月設計 担任技師 杉浦栄次郎

創業時  
(明治三十二年)



「明治三十一年四月起工  
担任技師 杉浦栄次郎」

### ドックの構造

1. レンガ  
船渠側壁・底部用:約130万個  
(上等焼過レンガ等を愛知県安城市の岡田煉瓦製造所創業者 岡田氏から購入)  
船渠裏込用:約85万個  
(久比里・久我氏から購入)
2. セメント  
外国産(イギリス・ドイツ)  
総量 1430.6t(8,300樽) ※1樽 380ポンド入
3. 石  
相州産堅石と割栗石 総量 約1377m<sup>3</sup>
4. ドックゲート(扉船式)  
当初国内製を採用予定だったが、物価高騰によりイギリスから購入

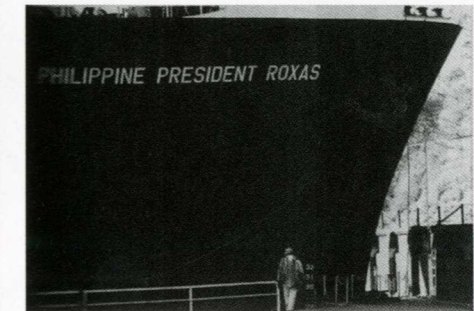
### ドックの大きさ

1. 長さ:148m(488.140尺)
2. 渠口の幅:上部 21m(70.290尺)  
下部 18m(59.070尺)
3. 深さ(渠口):10m(33.660尺)



↑ドック内側から見た拡張部分(コンクリート造)

昭和35(1960)年、ドックに入れる船を大きくするため、ドック最先端部の拡張工事を行いました。



↑道路にはみ出た高速貨物船(昭和36年)

昭和41(1966)年、護衛艦「まきぐも※」の建造時に、ソナーピット(船底部に取り付けられる超音波探知機用の穴)を造りました。

※護衛艦「くも型シリーズ」では対潜水艦探知能力増大のため、当時海外でも採用され始めた船首ソナードームを装備し、浦賀では5隻建造されました。「まきぐも」はこの1隻目です。



昭和58(1983)年、海側に28m拡張する工事で、ドックゲートもフラップ(前倒)式にしました。

現在

平成7(1995)年の試験艦「あすか※」の建造時に、ソナーピットを造りました。

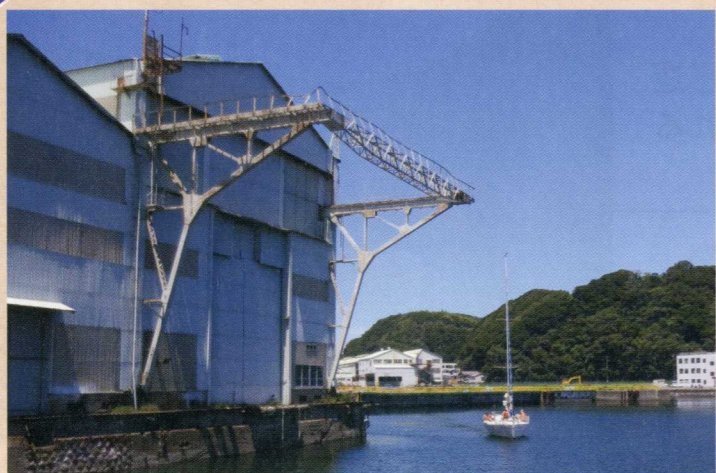
※最新鋭兵器機器装備試験艦で、船首部に巨大なソナードームを装備する特異な船型をしているため、取り付け時は、ゲート側を船首部にして入渠させました。





# 夏休み 海から陸から親子で 産業遺産見学会

平成28(2016)年7月30日(土)に開催した「第48回レンガドック活用イベント」では、特定非営利活動法人横須賀ヨット協会にご協力いただき、夏休みを迎えた小学生を対象にした見学会を開催しました。帆走するヨットに乗ってドックや浦賀港を海側から見学したり、レンガドック周辺を歩いて見学し、浦賀の歴史や魅力に触れてもらいました。当日の様子をレポートします。



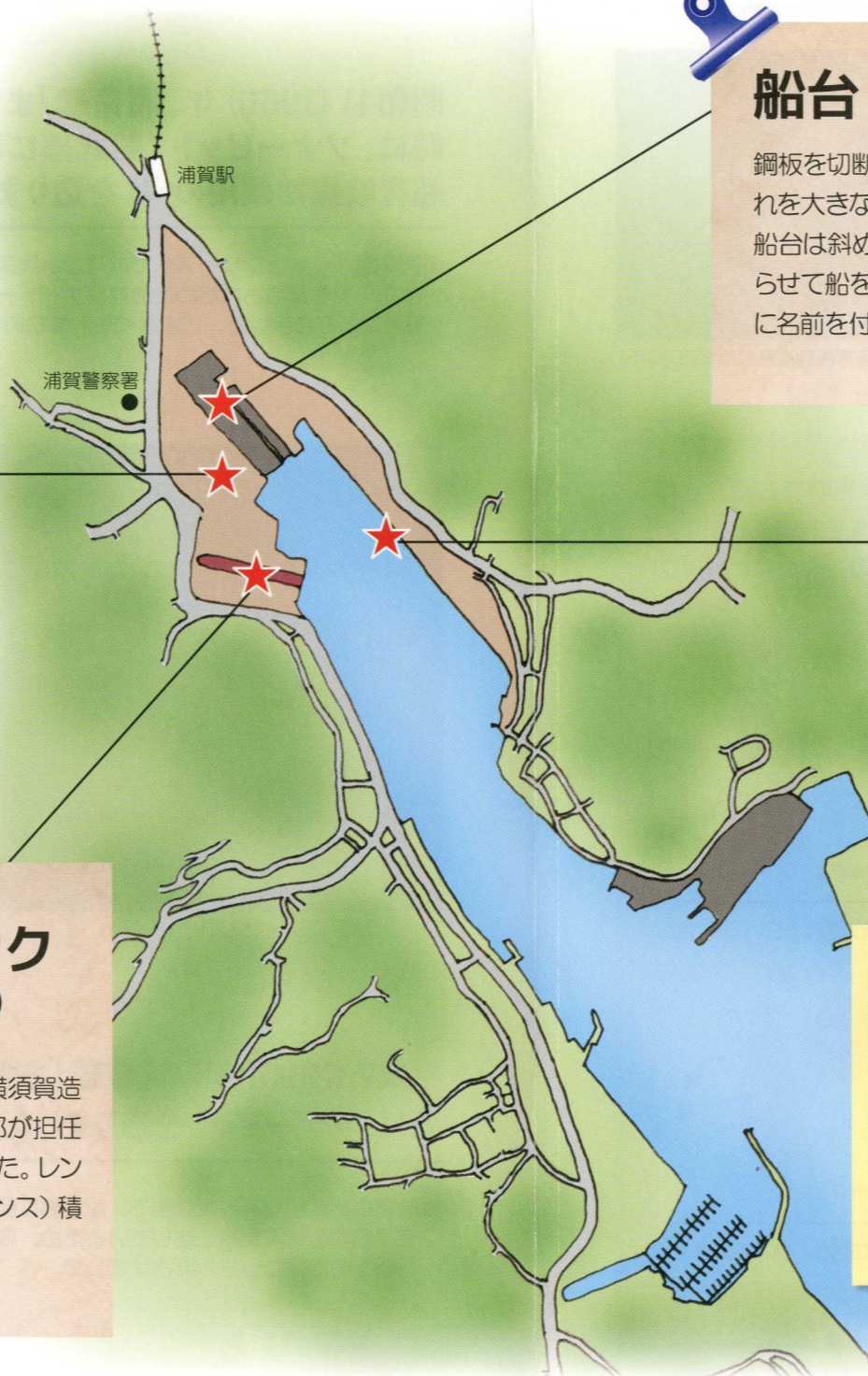
## 機関工場 —きかんこうじょう—

船の心臓であるエンジンやボイラーなどの内燃機関を船から取り外して修理した工場で、昭和13(1938)年建築しました。昭和19(1944)年、鉄筋コンクリート構造の建物を西通勤門側に増築しました。工場内には、大きく重たいものを移動させるための天井クレーンが6基あり、建物の高さは24mに及びます。



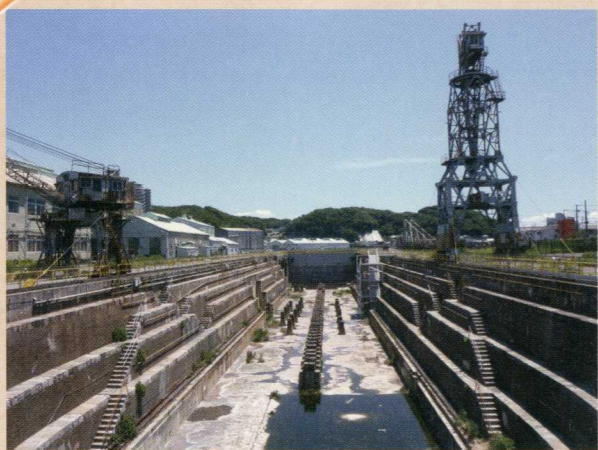
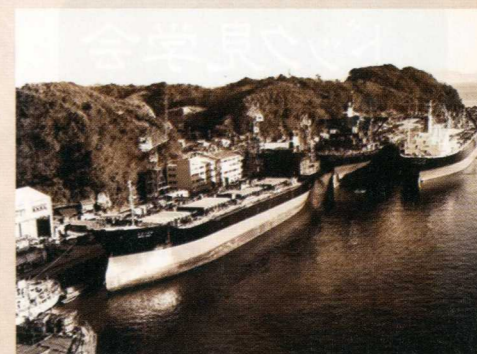
## 船台 —せんだい—

鋼板を切断・溶接加工して船の部位ごとにブロックを造り、それを大きなクレーンを使って、船台の上で組み立てました。船台は斜めになっていて、船が出来上がったら、船台の上を滑らせて船を海に降ろします。この作業を「進水式」といい、船に名前を付けたりして、お祝いしました。



## 艀装岸壁 —ぎそうがんぺき—

進水後、船を動かすために必要な諸機器(発電機、ポンプ類など)や、それらを結ぶためのパイプ、電線を取り付けたり、船がさびないようにペンキを塗ったりするために、岸壁に船をつないで作業しました。



## レンガドック (1号ドック)

明治32(1899)年、横須賀造船所出身の杉浦栄次郎が担任技師として建造しました。レンガはフランドル(フランス)積みです。



横須賀ヨット協会の方が乗船後にアコーディオンを弾いてくれました。

見学会の思い出を絵にしてくれました





## 産業遺産見学会を開催しました

「夏休み海から陸から親子で産業遺産見学会」と同時に、ボランティアスタッフによるガイド付きでレンガドック周辺を歩いて見学するツアー（約50分）を2回開催しました。



### 浦賀で写真展を開催していたクリストフ・レジェさんも参加しました

レジェさんのお父さんは元フランス海軍人で、昭和26(1951)年、当時乗っていた仏艦船「シュヴルイユ」が修理のため浦賀ドックに寄港した9か月間、浦賀の方々から日本語や柔道を習ったり、演芸場で踊りを見たりして交流を持ちました。今年7月、その思い出の日々を映した写真272枚を持って来日したレジェさんは、浦賀の住民有志の支えで写真展を開催しました。



(左)ガイドの中島さん、(中央)クリストフ・レジェさん、(右)写真展開催を支援する赤堀さん

## フランス軍艦の修理

昭和26(1951)年当時、フランス海軍当局は、住友重機械工業株のスルザー・エンジンの優れた技術、多くの軍艦建造の実績、米軍との関連、そして、従業員の勤続年数が長く安定している等に注目し、極東艦艇の日本における唯一の修理工場として指定し、昭和31(1956)年までに総計29隻を修理しました。



フランス極東海軍艦艇造修工事(昭和30年)

## ドックのお話⑩

### 昔、ドックで働いていた方へインタビュー

前号では、造船において高度な技術力が求められる「溶接」について紹介しました。今号では、船を海に降ろす「進水」について、山田俊雄さん(電気艦装)、新谷琢磨さん(鉄板曲げ加工)、桐内誠一さん(船装(鉄艦))にお話を伺いました。



(左)山田さん、(中央)新谷さん、(右)桐内さん

—進水に関する作業は主に船装課(木職)で行われていたそうですね。進水準備について教えてください。

進水準備は、だいたい1~3か月くらい前から、船体の出来上がりに合わせて、船を滑らせて海に降ろすための装置をつくり始めます。船台の上に、滑り台の役目をする固定台を海の中まで滑り込むように作り、その上に、船を乗せて滑る滑走台を取り付けていきます。そして、滑走台がスムーズに滑るようするため、固定台の上には直径10センチくらいのボール(鋼球)を並べていきます。

船と滑走台をしっかりと密着させるため、滑走台上に組んだ盤木の間隙を埋めるようにして、大矢(おおや)という三角形の形をした木を打ち込んでいく作業があります。これを矢締め(やじめ)といい、お寺の鐘

を打ち付けて鳴らすのと同じ仕組みで、角材を左右2人ずつの4人で引っ張り、それを振り子にして大矢を打ち込んでいきます。その作業を、かけ声をかけながら、船体の両側2組で行っていきます。

船は、進水させるまで滑ってしまわないように、トリッガーという留め具で固定しておき、進水式では、支綱切断(しこうせつだん)のあと、合図により、トリッガーストッパーをはずして、進水させます。

—船は、浦賀港のどのあたりまで進水させるのですか。

船台から沖に120~130mくらいの辺り、だいたい浦賀港の中央辺りまで進水させます。計画通りの位置でストップさせるため、重い鎖(ドラッグチェーン)を引っ張らせて、スピードを弱めてブレーキをかけます。船が止まったら、待機していた夕

グボートで岸壁につけ、艦装の作業に入ることになります。

進水に使ったボールや鎖は、漁業用に使われるようなワイヤーでできた網をあらかじめ固定台の先端に張っておき、あとで回収します。滑走台や大矢など、進水用に船に取り付けたものは、接岸後にダイバーが取り外します。2代目日本丸など船の形状が細長い船は、バランスを保つため浮力タンクを取り付けて進水させました。

—進水式は造船所にとっても、浦賀の人にとってもビッグイベントだったのでしょうか。

進水式では、岸壁の道路まで波が押し寄せてくるので交通整理などもされていました。進水はほんの1~2分ですが、造船における一番大切な作業であり、経験したどの進水も思い出深いです。

## チラリドック見学会

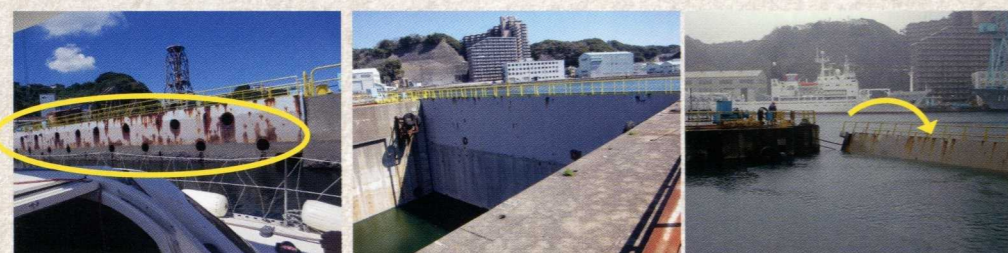
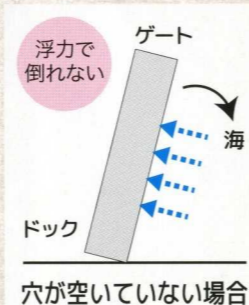
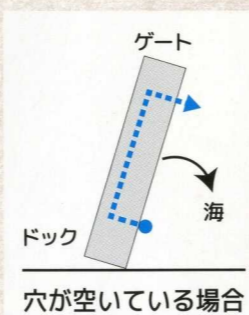
ドックゲート 海から編

第6号(平成26年10月1日発行)P3のチラリドック見学会でも紹介したドックゲートについて、今回は海側から見るとわかる構造をお伝えします。

昭和58(1983)年、ドック延長工事の際に、建造時の「扉船式」から「フラップ式(前倒式)」に改造されています。

ゲートは、海とドックの間の仕切りで、海水の水圧によってゲートがびたりと閉まり、海水を完全に遮断してドック内を乾いた状態にする役割をしています。船を海からドックに入れたり出したりするためにゲートを開けるときは、ドック内に海水を入れ、海側からの水圧とドック側の水圧を等しくさせることで、自重により海側に倒れる仕組みになっています。

そのゲート、海側から見ると鉄板に穴が空いています。ゲートは、厚みが約2mあり、中は空洞になっていて、ゲートが倒れるとき、下の穴から海水が入り、上にある穴から抜けるようにすることで、浮力を弱めて倒れやすくしています。もし、穴がない場合、水圧を全面に受けてしまい、開閉に力が必要になるのです。

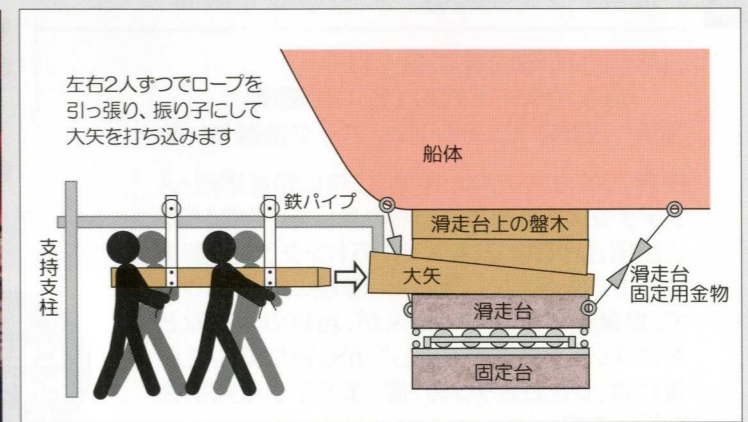


海側から見たドックゲート

ドック内側から見たドックゲート



進水準備



進水台の構造



# うらが 今昔 10

日露戦争後の不況は、浦賀ドックもその影響を大きく受けていた。うらが今昔⑩に記した明治43(1910)年7月の賃上げストライキは、一定の妥協案で収まったが、この年の10月に4代目社長となった足立太郎氏の経営方針を巡って、工場内が二つに割れる騒動が持ち上がっていた。

足立社長は、現在の東北線や高崎線、常磐線などがまだ民間企業の日本鉄道会社による運営のころ、社内で頭角を現し、その手腕を見込んだ渋沢栄一が、韓国で展開していた京仁鉄道や京釜鉄道で活躍させた人物であった。浦賀ドックへ来る前は、磐城炭礦の監査役、北海道の石狩石炭の取締役兼支配人をしており、これも渋沢の人事で浦賀ドックへ取締役で迎えられ、4代目社長となった。

新社長就任直前の9月には、前述の賃上げストライキの時に会社との交渉役をし、社員に信任が厚かった工場長の福地文一郎氏が辞任し、新

## 足立社長 退陣要求

郷土史家 山本詔一

工場長に石川綾治氏が就任していた。福地氏の他にも幹部社員の辞職が相次いでいた。

そこへ足立新社長が登場した。足立氏は鉄道事業や炭鉱事業で実績をあげた人であったので、その手法を浦賀ドックにも導入しようとした。まず配下の者2名を中心に、自分の腹心の者を続々入社させ、見習工を集めて新教育を施すことで、従来あった親方徒弟制度を一掃しようとした。

さらに、浦賀の工場長になった石川氏は海軍関係に顔が広く、また明治期の造船界の大物・緒明氏ともつながっていたので、この方面からの受注もあり実績をあげていたが、足立社長は石川工場長を技術部長に降格する人事を行った。

さらに、老練な工員は解雇するという人事刷新を図った。こうした性急で強引なやり方は、創業当時からの工員には受け入れられず、さらに信頼されていた石川工場長の降格問題が重なって、彼を擁護する工員が一斉に立ち上がった。その端緒は製缶工場で足立社長の息がかかった技師を襲撃したことで、両派の対立は次第に激化していった。

石川工場長の擁護派は、洞井戸(現・浦賀7丁目)にあった劇場・寿座に立てこもり、百姓一揆さながらに氣勢をあげた。これに対抗する足立社長一派は、三多摩から壮士集団を応援に駆り集めて寿座を襲撃すると脅し、浦賀の町全体が騒然たる空気に包まれた。

この後、擁護派は浦賀公園(現・愛宕山公園)に場所を移し、足立社長らの退陣を要求し、要求を飲めない場合は大規模なストライキをする旨を伝えた。浦賀の住人たちも擁護派の応援をしていた。こうした事態を重く見た浦賀ドックは、調査委員会を発足させて事態の收拾を図り、足立社長は就任からわずか14か月で退陣に追い込まれた。



4代社長 足立太郎氏

イベント情報

### 第50回レンガドック活用イベント —浦賀ドックの記憶—船舶修理を語る

日時: 2016年12月10日(土)  
13:00~16:00(12:30開場)  
場所: (仮称) ミュージアム・パーク推進センター

内容: レンガドックは、明治32年に船を修理・メンテナンスするために造られました。平成15年に閉鎖されるまで、およそ1万トンクラスの船までここで修理していました。修理の様子について、操業時に働いていた人が、当時の写真などをプロジェクターで上映しながら語ります。その後には、レンガドックの「底」まで下りる見学会を行います。

●本誌『レンガドックかわら版』は、浦賀行政センターなどに置いてあります。

事前申込制

- 定員: 先着100人
- 申込期間: 2016年11月21日(月)~12月5日(月)
- 申込方法: お電話にて横須賀市コールセンター  
(TEL: 822-2500/受付時間8:00~20:00、年中無休)へお申込みください。
- 参加費: 無料

ご意見、  
ご感想も  
お待ちしております!

発行 横須賀市 横須賀市小川町11  
編集 レンガドックかわら版編集部  
お問い合わせ レンガドック活用イベント実行委員会事務局  
(横須賀市 都市部 市街地整備景観課内)  
電話 046-822-8526 FAX 046-826-0420  
E-mail keikan-ci@city.yokosuka.kanagawa.jp